

平成23年度 自 己 評 価 表

鳥取県立皆生養護学校

中長期目標 (学校ビジョン)	学び、輝き、感動のある学校 幼児・児童・生徒が充実した学校生活を送り、個々の可能性を伸ばし、より良く生きることができるよう支援する学校 《 1 8 歳で自立できる人を育てる 》 ～社会に繋ぎ時代を生き抜く力の育成～	今年度の 重点目標	○幼児・児童・生徒の能力・特性に応じた指導の充実を図る。 ○幼児・児童・生徒の可能性を伸ばし、社会参加していく力を育てる。
-------------------	--	--------------	--

		年 度 当 初				中 間 評 価 (10)月		
評価項目		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
一人一人に視点をあてた学習指導の充実	自立活動部	●肢体不自由児に対する発達検査と、発達段階ごとの学習支援についての研修は充実したか。	●実態把握の方法や把握した実態に対する学習の設定に曖昧な面がある。	●全教員が実態把握とそれを活かした授業づくりに関する研修を受けていく。	●発達検査と発達段階の特徴に関する研修を複数回行う。 ●自立活動通信で実践事例を紹介していく。	●校外から2名の講師を複数回招き、研修を行った。	B	●発達検査の研修をもう一度行い授業づくりに活かせるようにする。
	教科指導部	●授業の改善を行い、児童の学力の向上を図る。	●研究授業、授業研究会を積み上げてきたが、授業研究会を十分なものすることができなかった。 ●各教科主任間の連携や各教師の教科指導に関する共通理解が十分とはいえない面がある。	●授業者支援会議が軌道にのっている。 ●簡潔で指導の意図がわかる指導案を作成し、個々の児童生徒の実態に応じた確かな学力をつける。	●授業者支援会議を推進する。 ●教科間の連携を図る。(公開授業、校内研究会) ●授業シートを活用し、教科内容を明確にした授業を推進する。	●授業者支援会議が軌道にのりつつある。 ●指導内容一覧表を作成した。	C	●グループ分けをし、公開授業後の授業を検証していく。 ●支援会議のあり方を検証する。 ●指導内容一覧表を活用し、授業シートを用いて教科等の内容を明確にして、計画・実践・評価を行う。
	研究	●研究テーマに沿った各研究グループの取り組みについて、情報交換・共通理解・確認する場を設定したことは、授業改善に有効だったか。	●昨年度まで、各研究グループの取組みが分かりにくく連携が弱かった。 ●外部専門家の指導助言を授業改善に活かしつつある。	●グループを中心とした取り組みが、学校全体のものとなり、PDCAサイクルを積上げた授業改善が行われている。	●個別の教育支援計画、個別の指導計画を活用した授業内容の精選と支援のあり方を検討しながらすすめる。 ●3年計画の3年目として、前年度までの積上げを活かし、研究のまとめとして、各グループによる研究授業を実施する。 ●外部講師を招いた研修会を開き、指導助言を活かした授業作りをすすめていく。	●グループ研究会では、実践報告や意見交換、今後の見通しを持ちながらの話し合いを行った。PDCAサイクルを意識し、授業公開後の検討会で、新しい取組みを取り入れたグループもある。 ●他グループの取組みを共通理解するため中間報告会を設定したが、他のグループの取組みが把握しきれなかった。じっくりと共通理解をする会を設定する時間がなかなかとれない。 ●外部講師を招き、指導助言を受け、授業改善に努めている。	C	●各グループの取組みが確認できるように、グループ研究会の記録を必ず共通フォルダに入れ、全体場で確認を促す。 ●公開授業の予定をメールや全体場で知らせ、可能な限りグループ内外の実践を参観し授業改善につなげていく。 ●全体の研究のまとめとして、外部講師を招き、各グループが授業研究会を実施する。(12月)
18歳の自立を見据えた進路指導の充実	進路指導部	●集めた情報を整理し、様々な方法で継続的に情報発信することができたか。 ●各学部の進路指導に関する共通理解を図ることができたか。	●進路に関する情報発信に取り組んでいるが、継続して必要である。 ●各学部においての進路指導に関する共通理解が十分とはいえない。	●ニーズを把握し、それらに基づいた情報収集・発信ができている。 ●各学部からの意見を踏まえ、進路指導計画の活用、見直しが進んでいる。	●定期的な進路指導通信の発行、職場開拓、施設・作業所見学、進路研修会等の実施。 ●幼稚部から高等部までの一貫した進路指導計画の活用の充実が図られるよう広報活動、校内研修等に努める。	●進路指導通信の発行はしているが、内容については不十分などところもある。 ●幼小小学部の進路指導年間計画が作成された。 ●進路指導計画の活用についての説明が不十分であり、活用・見直しが進んでいない。	D	●教職員・保護者にニーズに応えられる内容充実に向けて、アンケートの実施、情報収集に努める。 ●進路指導の手引(現在作成中)を教職員に配布し、各学部の進路指導に関する取り組みが把握できるようにする。 ●校外から講師を招いてキャリア教育の視点による教育課程及び授業改善に向けた研修を実施する。
ニーズに対応できる専門性の向上	自立活動部	●発達に応じた教材・教具の整備をすることと実践例紹介はニーズに対応できたか。 ●支援機器、自助具の機能別整理をすることとそれらの使用例紹介はニーズに対応できたか。	●養護・訓練時代の教材、支援機器等はあるが、必要なものがどこにあるのかわかりにくい。また、使い方、学習利用に最適な発達段階や動作の状態がわからないことがある。	●発達段階や身体動きに応じて、教材・教具、支援機器を整理・整備する計画が立ち、1年目の取り組みを終えている。	●発達段階に応じた学習内容に適した教材・教具の研修を行う。 ●動作の状態に応じた支援機器の利用についての研修行う。 ●自立活動通信で実践事例を紹介していく。	●自立活動研修会として、発達と教材・教具に関する研修会を行った。 ●夏休み教材・教具展を開き、教員の意識向上を図った。	C	●引き続き研修と、自立活動通信での実践紹介を続ける。 ●教材・教具庫の整備を進める。
センター的機能の推進	支援部	●肢体不自由特別支援学校としての専門性を発揮できたか。	●肢体不自由児の障がい特性を踏まえた支援の在り方についての情報提供が十分ではない。	●地域支援活動や教育相談活動を円滑に行い、ニーズや課題に応じた効果的な支援を行っている。	●担任研修会、学校公開、地域訪問、キャンプ等を通して、地域子どもたちの実態やニーズ・課題の把握に努める。 ●関係機関や特別支援学校との情報交換に努める。	●研修会設定ー肢体支援学校間での連携による県内全体への支援活動の広がりが見えてきた。 ●地域の学校のニーズの把握やニーズを踏まえた情報提供が不十分である。 ●校内職員による「センター的機能」の理解が十分とはいえない。	D	●地域の学校に向け、支援方法を工夫する。(校内体制への配慮、魅力的な研修内容の提供、HPの活用による情報発信) ●校内職員に向けた情報発信をする。(掲示、終礼等連絡、HP活用)
社会に繋ぐ活動の推進	交流活動	●実態や生活年齢に合った交流活動ができたか。 ●交流及び共同学習を通して互いを認め合ったり、学び合ったりすることができたか。	●教育課程上の位置づけやねらい、評価等を明確にしていく必要がある。	●幼児・児童・生徒相互、地域の人々との交流活動を通して経験を深め、社会性を養うとともに、積極的に社会に参加しようとする態度を育てる。 ●教育課程上の位置づけやねらい、評価等を明確にする。	●交流校への情報発信と共通理解を図る。 ●打ち合わせ会や反省会の充実を図る。 ●手紙、ビデオレター等の間接交流を行う。	●今年度から本校、交流相手校双方が教育課程上の位置づけやねらい等を明確にして活動に取り組んでいるところである。 ●学部によっては交流校の意識や関わり方に差がある。 ●他学部の交流の様子が分からない。	C	●交流相手校の意識を高めるための十分な話し合いをする。 ●事前・事後指導をきちんと行い、発展性のある交流にしていく。 ●他学部の交流について情報交換や共通理解の場を持つ。
	学習情報部	●リアルタイムな情報発信ができているか。 ●記事内容は、閲覧者の期待するものとなっているか。	●作成後の校内稟議システムにより、公開までに時間差ができてしまう。リアルタイムに記事更新できていない。 ●記事更新に関わっている者が一部の職員になりがちなため、内容が偏りがちになっている。	●稟議システムの合理化をはかる等により、迅速に情報発信できるようにする。 ●記事作成に関わる職員が増え、情報内容も幅広いものになる。	●稟議システムを改善、簡略化し、迅速に公開できるようにする。 ●ホームページ作成研修会をもち、ほとんどの職員が記事作成に関われるようにする。	●稟議システムの改善により、迅速に情報発信できるようになった。 ●研修会を行ったが、記事作成に係わる職員が多少増えただけだった。	C	●今後も正確で迅速な記事点検、稟議を行い、リアルタイムな記事更新に努めていく。 ●多くの職員が記事作成に係われるように、学部のコーナーを中心に、各学部でスケジュールや当番等を決めて取り組む。

評価基準 A: 十分達成 B: 概ね達成 C: 変化の兆し D: まだ不十分 E: 目標・方策の見直し
【100%】 【80%程度】 【60%程度】 【40%程度】 【30%以下】